特集1｜続・生き続ける建築

11

明治17年、木子七郎は宮内省内匠寮の技師・木子清敬の四男として東京に生まれた。
10歳年長の兄・幸三郎と七郎は建築を志し、東京帝国大学工科大学建築学科に進むが、
卒業後、兄は宮内省の技師の道を選び、七郎は大阪に赴き果敢な活躍をみせていた大林組に入った。明治44年のことである。
七郎は入社早々から凄腕ぶりを発揮したらしい。程なく新田家の建築顧問になったことからみても、
新田帯革製造所（現・ニッタ株式会社）の一連の仕事を通してクライアントとの強い信頼関係がうかがえる。
やがて社主・新田長次郎の長女・カツと結婚するが、これが七郎の人生を大きく変えたことになる。

大正2年、木子は大林組を退職し、大阪に木子七郎建築事務所を開設した。
これを機に在阪建築家として、黎明期の大阪で和洋を巧みにこなす建築家として活躍した。
作品は、愛媛県庁、新潟県庁を始め、学校、銀行、病院、オフィスビル、工場、住宅と、きわめて多岐にわたっている。
また、新田家関連の仕事や、長次郎の郷里・松山の仕事も多くこなし、多彩な作品を残した。
一方、赤十字社への尽力も見逃せない。多大な功績に対し、仏・独・伊、そして日本の赤十字社から数々の勲章を受けている。

今号では、宮廷建築家として活躍した名門・木子家に生まれながら、
今まであまり語られることがなかった木子七郎の生涯と、彼の残した作品に光を当てた。

木子七郎

Shichiro Kigo

所蔵：ニッタ株式会社史料室

卒業設計「DESIGN FOR A STORE BUILDING」詳細図［部分、1911］
［所蔵：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻］

独自に生きた様式建築家｜山形政昭｜Masaaki Yamagata

1――はじめに

大正2年［1913］、大阪において建築事務所を開設した木子七郎の事績について、今日知られることは多くはないようだが、松山城勝山の麓に建つフランス・ルネサンス・スタイルの「萬翠荘（旧・久松定謨伯爵別邸）」［1922］[1]や、西宮甲子園に所在する「松山大学温山記念会館（旧・新田利國邸）」［1928］など、それぞれ上質な様式建築として広く知られていよう。また先年、重要文化財となった琴ノ浦温山荘園（旧・琴乃浦温山荘）[2]の大規模な「主屋（旧・新田長次郎別荘）」［1915］など近代和風建築を残しており、それに「愛媛県庁舎」［1929］、「新潟県庁舎」［1932］など、昭和初期において2つ以上の県庁舎を残した建築家は多くない。木子はそうした際立った実績をかなり広範に残しながら、氏の建築活動は独自なもの故に、多くの謎を今も残している。

2――出自と独立、そして新田家建築顧問

木子七郎は明治17年［1884］、宮内省内匠寮技師を務める木子清敬（きよよし）[3]の四男として東京に生まれている。父・清敬は宮内省技師として明治宮殿造営の中心を担うなど、皇室関係の建築にかかわる一方、各地の古社寺修理を行い、さらに東京帝国大学で日本建築学を講じるなど、明治期における和風建築の権威として知られた建築家であった。また10歳年長の兄・幸三郎は東京帝国大学建築学科を明治34年［1901］に卒業し、住友建築部勤務を経て明治44年［1911］宮内省に入り、父に続いて宮廷建築家としての道を歩んでいた。七郎はそうした恵まれた木子家の環境の下で育ち、明治44年に東京帝国大学建築学科を卒業し、大林組に入社した。
入社後まもなく担当した建築に「北浜銀行堂島支店」［1912］がある。鉄骨煉瓦造4階建てルネサンス・スタイルの建築で、当時の大林組の設計・施工の作品としても傑出したものとなった。この建築と前後して、木子は新田帯革（ベルト）製造所[4]の建築を担当したことで、社主・新田長次郎の知遇を得て新田家の建築顧問となる。また長次郎の長女・カツ（勝子）との縁談が進み、結婚を控えた大正2年に大林組を退社し、大阪東区十二軒町に構えた「自邸兼事務所（木子七郎自邸）」［1913］において、木子七郎建築事務所を開設した。大阪の建築設計事務所としては、明治中期に開設されていた茂庄五郎（しげしょうごろう）の事務所、辰野片岡建築事務所に続き、藤田組に招かれて来阪し活躍していた宗兵蔵（そうひょうぞう）の独立と同じ時期であり、木子は黎明期の在阪建築家の一人となった。一方、実務においては新田家の建築顧問として種々の建築を担当することとなる。
新田帯革製造所の煉瓦造3階建て「新工場」［1913］建設工事が進む大正元年［1912］頃から新たな仕事となったのが、長次郎自ら南紀の海南に好適地を求め、造園計画に尽力したという大規模な和風別荘・琴乃浦温山荘の建築であり、和の建築においても非凡なる技量を表したが、本格的な建築活動は大正10年［1921］における中国、インド、欧州、北米の建築視察大旅行の後に開花した。すなわち帰国の翌年に竣工したのが松山の萬翠荘であり、その翌年にセセッション・スタイルの「新田帯革製造所名古屋出張所」、さらに「松山高等商業学校」［いずれも1923］を建てており、和洋を含めた様式建築を巧みに扱う氏の本領を発揮した。

3――新田長次郎との絆

安政4年、愛媛県松山市（温泉群山西村）に生まれた新田長次郎［1857–1936］は、明治10年［1877］に大阪に出て、藤田組製革所勤務などを経て明治18年［1885］に独立し、明治21年［1888］に我が国初の動力伝達用革ベルトを製造し、明治42年［1909］に合資会社新田帯革製造所を起こし

愛媛県庁舎｜上――外観／下――正面玄関ロビー［出典：『愛媛県庁本館建築記録』［愛媛県／1994］］
愛媛県4代目庁舎として、1929年に竣工。ドーム屋根の塔屋を置いた、左右対称形4階建ての建築。クラシック・スタイルを用いて全体に堅実な手法でまとめられている。内部においては玄関および階段ホール、3階貴賓室、4階正庁の特色ある意匠が注目される。1993年に外壁などを修理

上――**新田帯革製造所新工場**｜1913年竣工［所蔵：ニッタ株式会社史料室］／下――**新田帯革製造所名古屋出張所**｜1923年竣工［出典：『新田ベルト九十年史』［新田ベルト九十年史編纂委員会／1975］］

[1] 『萬翠荘調査報告書』［奈良文化財研究所編、愛媛県教育委員会／2010］に詳しい
[2] 『琴ノ浦温山荘園建築調査報告書』、『琴ノ浦温山荘園庭園調査報告書』［共に財団法人琴ノ浦温山荘園／2009］に詳しい
[3] 木子清敬の経歴と作品に関しては、稲葉信子「木子清敬と明治20年代の日本建築学に関する研究」［東京工業大学（博士論文）／1990］に詳しい
[4] 現・ニッタ株式会社

久松定謨伯爵別邸｜大階段室のステンドグラス

祭原商店｜1930年竣工[出典:『近代建築画譜』[近代建築畫譜刊行會/1936]]

新田帯革製造所東京出張所｜1930年竣工。JR新橋駅近くの角地に建てられた、角に塔屋を設けた5階建ての建築。外壁をスクラッチタイルとテラコッタで装い、半円アーチと壁面上部に付されたロンバルディアバンドによってロマネスクの要素をもつ。一方、窓まわりの装飾やアイアングリルの扱いから、スパニッシュ・スタイルといわれていた[出典:『建築世界』1930.6]

日本赤十字大阪支部病院｜RC造4階建ての大規模病院建築で、1929-34年にかけ数次に分けて建築された[出典:『近代建築画譜』]

た在阪事業家である。氏は昭和10年[1935]に『回顧七十有七年』[5]を著わしており、氏の半生を記している。

その伝えるところ、町工場からの創業であったが、人一倍の努力に加えて、明治26年[1893]には単身渡米し、シカゴ万博を視察するなど世界の工業に目を向ける事業家であった。また郷里・松山を慕う長次郎は、旧藩主筋にあたる久松定謨(さだこと)伯爵を敬慕し、伯爵来阪時の滞在をひとつの目的として、琴乃浦温山荘[1913-16]の建設に着手している。その計画は長次郎自ら描いたと伝えられているが、茶室および庭園は武者小路千家の家元名代であった木津宗詮(そうせん)、主屋の計画は木子七郎によるものであろう。海水を引き込んだ珍しい潮入りの池をもつ和風庭園の中に主屋、浜座敷、茶室などを配している。主屋は鉄筋コンクリート造の高い基礎上に、洋式トラス小屋組の入母屋造りの2重屋根を架けた主座敷棟と寄棟屋根の内玄関棟を接続し、広大な庭園の眺めを有する24畳の主座敷をもつ特色ある書院造り建築であり、木子による和風建築として注目されるものである。

また本建築は大正中期になされたとみられる増改築に際して、珍しいベニヤ合板が諸所に用いられている。そのベニヤこそ長次郎がつくり始めた国産初の合板ベニヤで、牛皮から取れるゼラチンを膠着剤に用い、米国製ベニヤ製造機を導入して大正8年[1919]、新田ベニヤ製造所[6]を設立していたのである。さらに後年、ベニヤ製造所にベニヤドア部を設置するなど、長次郎はベニヤの事業を通して建築資材の分野にも乗り出していたのである。

その別荘がほぼ整った頃、旧松山城内の一角に久松定謨伯爵の別邸となる萬翠荘の設計が依頼されたのであり、大正10年の海外視察はそれをひとつの目的とした旅だったかもしれない。大正11年[1922]に建てられた萬翠荘は、スレート葺きの腰高マンサード屋根に端的にうかがえるように、フランス・ルネサンス・スタイルを基とする歴史様式の建築で、我が国洋風邸宅の名作のひとつに数えられるものである。その精緻で古典的な表現は、玄関ポーチのコリント式オーダーや、窓まわりのアーキトレーブ、ベランダの構成、各室内の意匠に及んでいる。一方で白い小口タイル張りの外壁仕上げ、そして擬石研ぎ出し仕上げの独立円柱などの新しい表現、さらに大階段室を飾る帆船をモティーフとした明朗な表現の木内真太郎[7]によるステンドグラス、そして鉄筋コンクリート構造と鉄骨小屋組による構造であることなど、当時の近代的特色とみられる構法を備えていた。

4——内藤多仲との縁

様式建築を得意としてきた木子七郎であるが、萬翠荘が鉄筋コンクリート造(以下、RC造と記す)であったように、氏のRC造への関心は高いものがあった。その背景には東大時代から同期生であった内藤多仲[1886-1970]との親交があったようだ。やがて耐震構造学の大家となる内藤博士は明治45年[1912]から早稲田大学教授に就いており、勤務地近くに我が国最初といわれる壁式RC造の「自邸(内藤多仲邸)」を計画し、その設計は木子に、また今井兼次の協力を得て、大正15年[1926]に建てている[8]。この設計を契機として木子はRC造による合理的な設計を目指したようで、昭和初期に数棟の業務ビル、学校建築など、そして一群をなす日本赤十字社病院の建築を残している。

木子の個性がうかがえる代表的なものに、大阪で拡張整備の進んでいた御堂筋の本町近くに建った「祭原商店」[1930]がある。スクラッチタイル張りの壁面にロマネスク調意匠を織り込んだ地上6階建ての印象深い外観が知られている。また同年、祭原商店と同種スタイルの外観で、塔屋をもつ5階建ての存在感ある「新田帯革製造所東京出張所」(通称・新田ビル)[9]が、外堀川(昭和30年頃埋め立て)沿いの銀座8丁目角地に建っていた。

一方、氏と日本赤十字社との機縁は不明であるが、大正15年に日本赤十字社大阪支部嘱託、同支部病院建築主任となっている。そして、日本赤十字社から派遣されて朝鮮半島および中国の病院建築視察を行い、昭和初期には各地施設の設計で活躍した。最初に建ったのが大阪市東区の「日本赤十字大阪支部」[1929]で、続いて天王寺区に昭和4年[1929]より3期6年を要して建設された「日本赤十字大阪支部病院」があり、大型スチールサッシを用いて明るく、機能的・計画的デザインを追及したと共に、弓形に張り出した壁面構成やステンドグラスの装飾など諸所に個性的造形も配した建築で、木子による赤十字病院における代表作であり、大阪随一の白亜の大病院といわれたものであった。

5——「スパニッシュとアール・デコと和風の家」

木子七郎が書き留めた設計業績には、先の久松定謨伯爵別邸を始めとして13件の住宅名が列記されている。しかしながら所在地、建築年の記録はなく内容が分かるものは多くないが、新田長次郎の5人の息子にそれぞれ建てた5棟の住宅があり、種々の記録を留めている。その代表的な住宅が昭和3年[1928]に建てられた「新田利國(長男・利一の子)邸」であり、平成元年[1989]松山大学に寄贈され、温山記念会館として維持されているものである。

車寄せを備えた正面外観は、スパニッシュ瓦葺き、クリーム色のスタッコ壁、玄関まわりを飾るアラベスク模様のタイルと重厚な木製扉によって、本格的なスパニッシュ・スタイルであることが分かる。しかし内部に入ると優雅なクラシック・スタイルの談話室、アール・デコのインテリアが目を惹く撞球室など室内意匠は多彩であり、さらに1、2階ともに南西の一角は和室のゾーンとされ、2階10畳座敷にはモダンな違い棚、サンルームのような広縁を備えている。こうした本邸の特色について、平成4年[1992]にここを訪れた藤森照信博士は、簡潔に「スパニッシュとアール・デコと和風の家」と表題を付けて紹介された[10]。つまり、スパニッシュを基調に種々のスタイルを適切に、かつ本格的に導入しているところに特色があり、とりわけ洋と和の並存が鮮やかなことである。

そうした特色は庭園にもあり、正面の西側は車寄せに向かう石畳みのアプローチを配した格調の高い構成、南の庭は広い芝庭に長円形の池を配置した南欧風、そして東に進むと灯籠を設置した和風の池泉庭園となっている。平地の敷地であるが、高い擁壁を土留めとして築山を設けて流れを回らせた凝った造園である。その指図は庭づくりを趣味とした長次郎によるものと伝えられており、ここは娘婿にあたる建築家・木子との幸せな共作となっているのである。

木子七郎はモダンで洒落た紳士であったと伝えられている。大正10年の欧米を回る旅、そしてフランス生活の長い経験をもつ久松定謨伯爵の感化によるものかもしれない。氏は日本赤十字社への貢献が称えられ、昭和11年[1936]にフランス政府よりシュバリエー・ド・ラ・レジオン・ドヌール勲章が授与されたのを始め、各国から受賞の栄誉に浴している。こうしたことで外国とのさまざまな交流をもっていたのであろう。伊達者な一面をのぞかせたものに木子による珍しい私家本がある。昭和5年[1930]につくられたもので『招健康像』と題する小さな絵本である。ベルギーから贈られたマネケンピス(小便小僧)が自邸のベランダに設置されたのを機会に、その像にさまざまな衣装を着せてみせた着色写真で構成した絵本で、像の来歴についてドイツ語の巻頭言を付すという凝った趣味があふれたものなのである。その自邸は現存しており、大正初期の建築と伝えられている、モダンにアレンジされたスパニッシュ住宅であるが、昭和20年[1945]の戦災を受けたことなどで、当初の様子は必ずしも判然としないのである。被災後まもなく夫妻は熱海に移り、その後の消息は乏しく、昭和20年3月に自らタイプを打った履歴書[11]だけを残して、昭和29年[1954]に木子は没している。

やまがた・まさあき——大阪芸術大学建築学科教授・同大学大学院芸術研究科教授/1949年生まれ。
京都工芸繊維大学建築学科卒業、同大学大学院修士課程修了。工学博士。建築歴史・建築計画専攻。
とりわけ、ヴォーリズの建築と、関西の近代建築に関心があり、調査研究を行う。
主な著書:『ヴォーリズの建築』[創元社/1989]、『ヴォーリズの西洋館』[淡交社/2001]など。

新田利國邸
上——玄関ポーチ:スパニッシュ・テイストの濃いタイルだが、ここではモダンな感覚ものぞく
中——階段まわり
下——2階娯楽室の一角:撞球台を置き、アール・デコの優れたインテリアをもつ娯楽室のコーナー窓と長椅子

[5] 『回顧七十有七年』新田長次郎著[新田帯革製造所/1935]
[6] 現・株式会社ニッタクス
[7] 木内真太郎と木子七郎との仕事上の関係は、木内家資料により1916年から種々認められる[参照:『萬翠荘調査報告書』]
[8] 『内藤多仲博士の業績』[鹿島研究所出版会/1967]による。住宅は1986年に整備され、「早稲田大学内藤多仲博士記念館」となっている
[9] 新田ビルは2005年の建替えに際して、『銀座八丁目の75年』[山形政昭監修、ニッタ株式会社/2007]が作成されている。本誌において「追憶新田ビル」を記した丸山もとこ博士は、本ビルの外観をスパニッシュ・スタイルの展開と解釈している
[10] 『歴史遺産 日本の洋館 第5巻 昭和篇1』文:藤森照信、写真:増田彰久[講談社/2003]
[11] 木子家蔵。用箋10ページにタイプ打ちされたもので、文末に日付けと自筆署名が記されている。内容は、学歴、職歴、顧問嘱託歴、そして業績として「三百余ニ及ブモ主ナルモノ」75件の建築を列記している

1

新田長次郎別荘

（現・琴ノ浦温山荘園 主屋）

竣工年：1915年（上棟年による）

所在地：和歌山県海南市船尾370
規模：地下1階、地上1階｜構造：木造
重要文化財

2

3

4

5

1——主座敷：24畳の広間は天井高10.5尺、内法高6尺と高く、東に6畳2間を備えている。広間は琵琶棚付きの床、違い棚などを備えた書院造りで、3方に縁を回し、高欄手摺りを付けた西面からは池泉庭園が望まれる。東側6畳2間との境に「波と兎図」の雄大な木彫欄間を配し、西側欄間には東郷平八郎揮筆による扁額「琴乃浦温山荘」を掛けている
2——主座敷欄間「波と兎図」：大波上を駆ける兎の木彫欄間で裏面に「大正乙卯冬日 雲楽刀」の銘をもつ。高村光雲に師事した相原雲楽の作であり、作品的価値は高く、また木子七郎とのさまざまな関連を想像させる
3——10畳座敷：大正中期の増築部にあたり、木子の意匠による幾何図案の欄間など個性がある。また天井には新田ベニヤ製造所製作による初期の合板ベニヤが用いられており、近代的な特色がある
4——西側庭園から見る主屋：琴ノ浦の海水を導入した潮入り庭園が特色であり、加えて池を渡る飛び石、石橋などに注目されるものがある。この対岸から主屋の全景が見渡せる
5——昭和初期の琴乃浦温山荘：矢ノ島を取り込んだ海浜別荘で、往事は5万坪を有していた［出典：『回顧七十有七年』］

久松定謨伯爵別邸
（現・萬翠荘）

竣工年:1922年

所在地:愛媛県松山市一番町3-3-7
規模:地下1階、地上3階｜構造:RC造、一部S造
重要文化財

2

3

4

1——隣接する「坂の上の雲ミュージアム」のテラスから望む:鱗形天然スレート葺きのマンサード屋根、クラシックなバルコニーの表現など、典型的なフランス・ルネサンス・スタイルを表している。棟飾り、そしてドーマー窓の屋根の構成もマンサード型で、繊細な意匠に包まれている。一方、RC造の躯体とS造の小屋組、外壁には白色磁器タイルなど、近代的特色を備えている

2——食堂（現・晩餐の間）:濃く塗装された高い腰板壁、大梁、小梁で構成される天井など格調が高い。一方、果物図案のステンドグラス、優雅な暖炉構成など目を楽しませる意匠をもつ

3——居間（現・第5展示室）:2階中央の部屋で、南に玄関ポーチ上部のバルコニーを備えている。写真反対側の欄間のステンドグラス、大鏡を配したマントルピースも華やか。天井の漆喰レリーフにも特色がある

4——収蔵庫:昭和初期の建築とみられているもので、土蔵造りの意匠を基としたRC造3階建ての蔵。階下の腰壁が広がり、外観意匠にも特色がある。鋼鉄製防火扉、窓には網入りガラスと鋼鉄扉を備えている

1

松山大学温山記念会館
（旧・新田利國邸）

竣工年:1928年

所在地:兵庫県西宮市甲子園口1-12-31｜規模:地下1階、地上2階｜構造:RC造
国登録有形文化財

2

3

4

5

1——玄関:玄関ポーチから玄関まわりは、伝統的なスパニッシュを目指したインテリアとされるところ。重厚な木製扉、アラベスク装飾のタイルも本格的であるが、アーチ型小窓の装飾ガラスは特色がある。ビン底のような円形ガラスは、中世の教会堂以来の伝統的製法のガラスでクラウンガラスといわれ、それをつないだ飾り窓はロンデル窓と称されている

2——南面全景:ベイウインドウ状に突出した壁面と深い軒のつくる陰影がコントラストを生み出す外観。庭は南欧風だが、この南西部分には和室が納まっている

3——玄関ホール:湾曲する壁面に沿って階段が配置されている。また、2階バルコニーから3連の窓を通して入る光が印象的な効果を生んでいる

4——2階10畳座敷（現・宿泊室）:木子七郎の特色といえるモダンな床棚を備えている。また写真右端の障子を開けると広い縁があり、出窓風に窓を開けている

5——居間に続くサンルーム（現・第3セミナー室）:ヴォールト天井とステンドグラスの入るアーチ型窓が、特色ある空間をつくっている

ドキュメント・ファイル | Document Files

内藤多仲邸

早稲田大学教授であった内藤多仲は、1917年の米国留学を経て1924年に「架構建築耐震構造論」を著わし工学博士となり、いよいよ斯界の大家として本格的な活動に入る。そうした時期に大学に近い新宿区若松町の敷地を得て、木子七郎の設計協力により、実験的なRC造の自邸を建てている。

その設計について後年、内藤自ら次のように記している。「…設計は同級で親友の木子七郎君にお願いし、今井兼次君の協力も得、構造は自分でやった。それで考えたのは、住宅程度のものでは柱はじゃまで不用だから、箱を作るように壁とスラブでだけで十分だろう。(中略)これが計らずも戦後の壁式構法の先駆第一号となった訳である」[出典:『内藤多仲博士の業績』[鹿島研究所出版会/1967]]

1970年の博士没後に、遺邸は大学に寄贈され、1986年の改修を経て「早稲田大学内藤多仲博士記念館」となり、博士の遺品、資料と共に木子の認印をもつ本邸の設計図面も収蔵されている

–

1——南面正面全景 | 2——居間:アーチ型の大窓で明るく、天井には浅いモールディング装飾が付されている | 3——書斎:合理的な設計と共に、灯具、家具の優れた意匠にも目が留まる

–

内藤邸設計図[1925]:壁式RC造2階建て、一部に地階を有している。2階上部に回る2重の庇、つくり付け家具の計画と意匠も特色がある

4——平面・立面・断面・天井伏(部分) | 5——壱階各部屋見取図 | 6——台所其他詳細

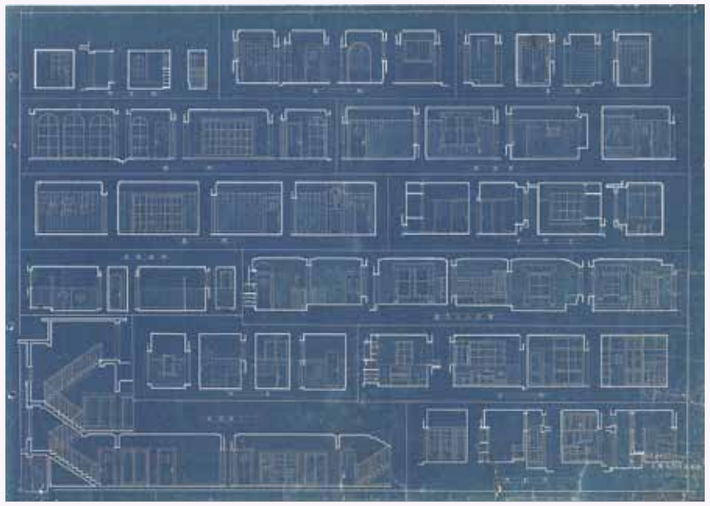
[所蔵:早稲田大学内藤多仲博士記念館]

1

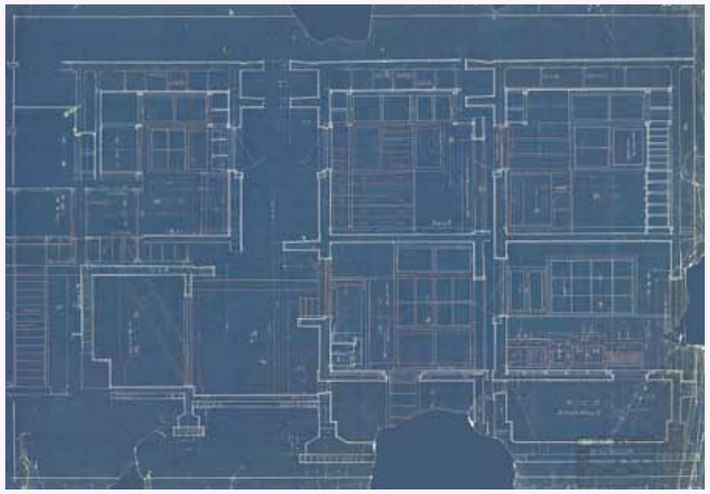
2

3

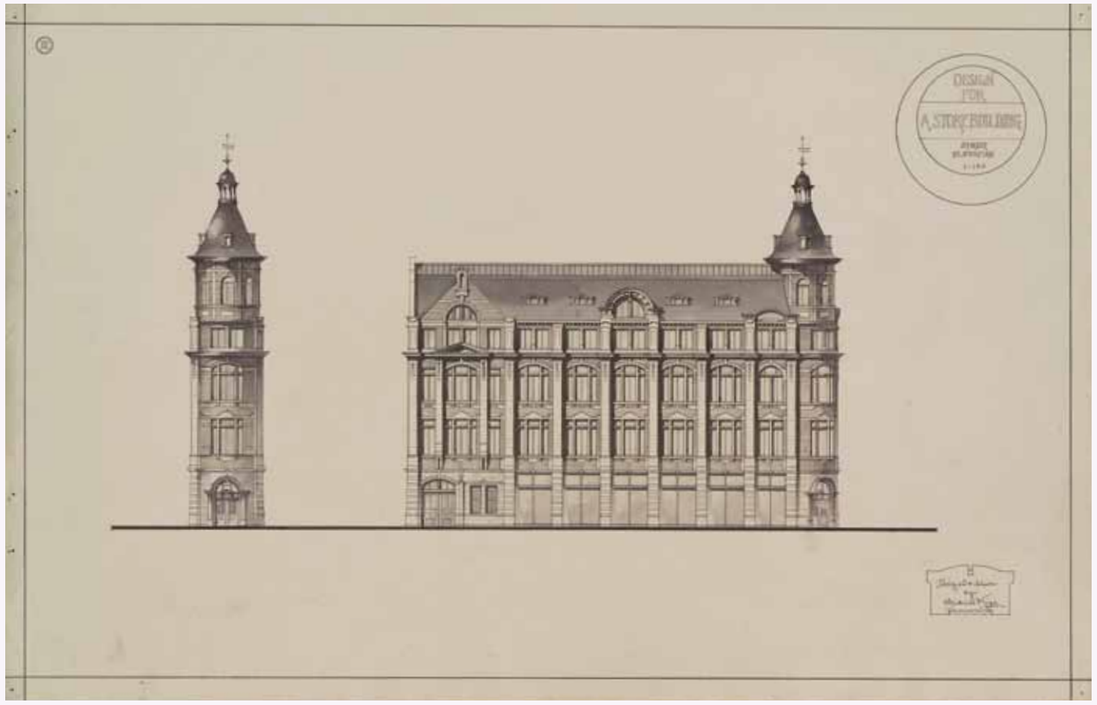
4



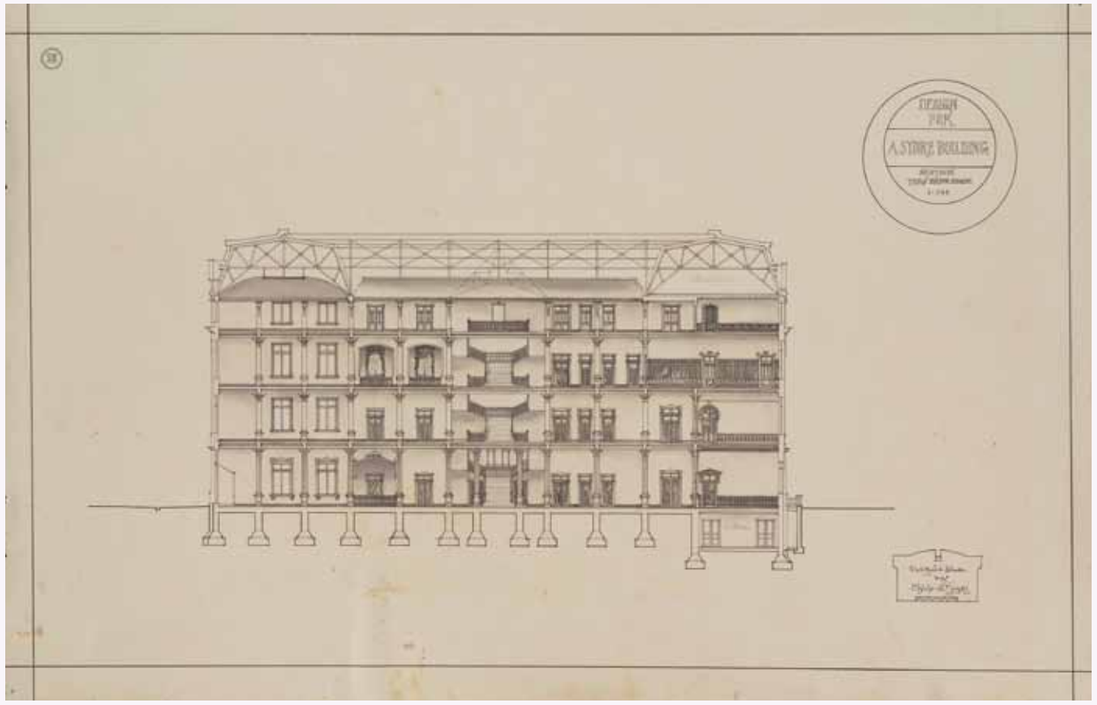
5



6



7



8

卒業設計「DESIGN FOR A STORE BUILDING」[1911]:煉瓦造4階建ての商業ビルの計画である。
赤煉瓦によるヴィクトリアン風の折衷様式といえる意匠であるが、フランス風の中折型屋根であることと、屋根に軽快な鉄骨造が用いられているところなど、後年の作品に続くものとして興味深い

7——STREET ELEVATION | 8——SECTION THRO' SHOW SPACE [所蔵:東京大学大学院工学系研究科建築学専攻]

略歴 | Biography

明治17年[1884] 4月29日、木子清敬の四男として東京に生まれる
明治44年[1911] 3月、東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し、大林組入社
大正元年[1912] 新田帯革製造所、その他関連会社の建築顧問となる
大正2年[1913] 6月、大林組退職。8月10日、新田長次郎の長女・カツと結婚。この頃、自邸を建て(大阪東区十二軒町)、同地で木子七郎建築事務所を開設
大正6年[1917] 5月、「雪と建築」が『建築と社会』に掲載
大正10年[1921] 2–11月、海外視察の旅(中国、インド、欧州各地、北米など)
大正11年[1922] 2月、「道路と住宅と建築家」が『建築と社会』に掲載
大正12年[1923] 10月、東京事務所を開設(麹町区永楽町2丁目、日本興銀ビル内)
大正15年[1926] 6月、日本赤十字社大阪支部嘱託、同支部病院建築主任となる。8月、東京事務所を閉鎖。9月、日本赤十字社大阪支部から病院建築視察のため朝鮮半島、中国各地に出張する。城北土地株式会社技術顧問となる
昭和11年[1936] フランス政府より「シュバリエー・ド・ラ・レジオン・ドヌール」勲章を受ける
昭和13年[1938] ドイツ政府より「赤十字勲功十字賞」を受ける
昭和14年[1939] ローマ聖皇より星章附「コンマンドール・サン・シルベストル」勲章を受ける
昭和15年[1940] 財団法人関西日仏学館評議員となる
昭和17年[1942] 多年、日本赤十字社に対し功績大なりと認められ、総裁閑院宮殿下より御付花瓶一個下賜される
昭和19年[1944] 日本赤十字社へ金壱萬円寄付につき、紺綬褒章を受ける
昭和20年[1945] 戦災で自邸の和室部分を焼失する。3月、履歴・業績書を記す。熱海市に転居する(伊豆山東足川)
昭和29年[1954] 熱海で逝去(70歳)

主な作品 | Works | ●印は現存 | ※印は所在不明

大正元年[1912] 北浜銀行堂島支店(大阪)
大正2年[1913] 新田帯革製造所新工場(大阪) | 木子七郎自邸(現・何邸)●(大阪)
大正4年[1915] 新田長次郎別荘(現・琴ノ浦温山荘園 主屋)●(和歌山)
大正7年[1918] 稲畑商店本社社屋(大阪)
大正9年[1920] 籔川銀行本店(島根)
大正11年[1922] 久松定謨伯爵別邸(現・萬翠荘)●(愛媛)
大正12年[1923] 松山高等商業学校(愛媛) | 新田帯革製造所名古屋出張店(愛知) | 新田長次郎邸(大阪) | 稲畑邸※
大正13年[1924] 田村駒本店(大阪)
大正14年[1925] 石崎汽船(愛媛) | 石崎汽船株式会社本社●(愛媛) | NHK東京中央放送局(東京)
大正15年[1926] 内藤多仲邸(現・早稲田大学内藤多仲博士記念館)●(東京)
昭和2年[1927] 大阪中央電話局(大阪)
昭和3年[1928] 新田利國邸(現・松山大学温山記念会館)●(兵庫)
昭和4年[1929] 新田愛祐邸(東京) | 松江商業会議所(島根) | 日本赤十字大阪支部(大阪) | 日本赤十字大阪支部病院(大阪) | 愛媛県庁舎(愛媛) | 東條産婦人科病院(大阪) | 新田昌次邸(大阪) | 鍵谷家記念堂(現・鍵谷カナ頌功堂)●(愛媛)
昭和5年[1930] 祭原商店(大阪) | 新田帯革製造所東京出張所(東京)
昭和7年[1932] 新潟県庁舎(新潟) | 新田宗一邸洋館離れ(大阪)
昭和8年[1933] 大阪府立夕陽丘女学校清香会館●(大阪)
昭和9年[1934] 大阪府立夕陽丘高等学校(大阪)
昭和10年[1935] 新田帯革製造所本社(大阪) | 大阪歯科医学専門学校付属病院(大阪) | 池田町公会堂(大阪)
昭和11年[1936] 関西日仏学館●(京都)
昭和12年[1937] 大阪警察病院(大阪) | 松山高等商業学校加藤記念館(愛媛)
昭和13年[1938] 新田長次郎銅像台座(大阪)

竣工年未確認 大阪逓信局々舎(大阪) | 京都聖護院郵便局(京都) | 松山市庁舎(愛媛) | 松江市公会堂(島根) | 大阪寝屋川警官住宅(大阪) | 愛媛県立図書館(愛媛) | 大阪国技館(大阪) | 東京放送局愛宕山放送所(東京) | 金沢商業会議所(石川) | 大阪織物同業組合事務所(大阪) | ドイツ文化研究所(京都) | 大阪府立高津中学校体育館(大阪) | 大阪高等工芸学校寄宿舎(大阪) | 松江銀行本店(島根) | 松江銀行米子支店(鳥取) | 山陰貯蓄銀行本店(島根) | 三和銀行吹田支店(大阪) | 百三十七銀行福知山支店(京都) | 伊予農業銀行(愛媛) | 米子銀行本店(鳥取) | 五十二銀行大町支店※ | 田代病院(東京) | 大野外科病院(大阪) | 満州電信電話株式会社別府保養所陵雲荘(大分) | 吉比商店(大阪) | 吉比商店東京支店(東京) | 浅沼商会(東京) | 日本皮革統制株式会社大阪支社(大阪) | 新田化学工業株式会社工場※ | 稲畑染工場※ | 東郷侯爵目黒本邸(東京) | 徳川圀順侯爵次男圀禎邸(東京) | 新田長三邸(大阪) | 吉比為之助邸(大阪) | 田村駒太郎邸一楽荘(兵庫) | 成田栄信別邸(大分) | 祭原邦太郎氏邸(兵庫)

琴乃浦温山荘庭園における家族写真[昭和初期]:後列右端に木子七郎、前列中央に新田長次郎夫妻、その右に長女で木子七郎夫人のカツが並ぶ[出典:『回顧七十有七年』]

その他の代表的な建物

左——稲畑商店本社社屋:大阪・南船場堺筋に面して1918年に建てられたフランス・ルネサンス・スタイルの建築。萬翠荘に先行する作例として興味深い[出典:『稲畑百年史』[稲畑産業/1991]]
右——関西日仏学館:1936年竣工。RC造2階建て、一部3階の建築で、講堂および教室などを配した文化施設。半円形の付け柱で分節された白い外壁と軒コーニスのバランスの良さが、穏やかな個性を表している。基本設計はオーギュスト・ペレに師事していた建築家レイモン・メストラレによる木造案[出典:『建築と社会』1936.7]

取材協力:公益財団法人琴ノ浦温山荘園/坂の上の雲ミュージアム/ニッタ株式会社史料室/萬翠荘/松山大学
参考資料:『歴史遺産 日本の洋館 第5巻 昭和篇1』文:藤森照信、写真:増田彰久[講談社/2003] | その他:特記のない写真は撮り下ろしです
次号予告:「INAX REPORT No.190」の「続・生き続ける建築」はジョサイア・コンドルです